

福島の子どもたちは、いま

「神奈川リフレッシュプログラム」へキックオフ

5月28日(土)

14:00 ~ 16:30(開場 13:45)

講演：被ばくから守り自然の中で子育てを

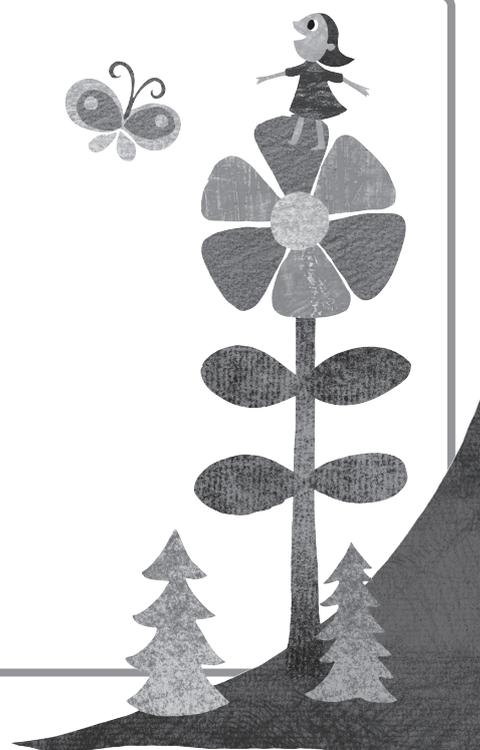
辺見妙子さん(NPO法人青空保育たけの子代表

/NPO法人福島の子どもたちを守る保養プロジェクト代表)

「こらっせユース」による報告：

檜葉学童保育を訪問

リフレッシュプログラムについて



3.11から5年が経過し、「フクシマ」が抱える問題は解決されていないのに、人々の関心は薄れつつあるようです。現地からは「フクシマを忘れないで」という声が聞こえてきます。「こらっせ」の活動も5年目にはいり、今年も「神奈川リフレッシュプログラム」のスタートをきる時期になりました。今年も、福島の子どもたちを被ばくから守ろうと長年活動されている辺見妙子さんを講師にお招きします。

辺見さんは歌が好きな保育士で、福島県の子育て支援委員もされていました。自然の中で遊び込む保育をしようと2009年4月、「青空保育たけの子」を設立。3.11以後は、保育活動の拠点を米沢へ移し、子どもたちをつれて福島から米沢へ通い自然の中での保育を続けています。辺見さんには保育士としてのご自身の体験と活動とともに、福島の子どもたち、お母さん・お父さんたちの今、福島県の子育て支援への姿勢についてお話していただきます。

「こらっせユース」の大学生たちも「こらっせ」の活動について報告します。

会場：県民サポートセンター 11階 コラボスタジオ

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5681/p16362.html>

参加費：500円

主催：福島子ども・こらっせ神奈川

連絡先：TEL:045-353-9008 FAX:045-353-9998

E-mail: info@korasse-kanagawa.org



被ばくから守り自然の中で子育てを -2016年キックオフ講演会報告-

5月29日(土)神奈川県民サポートセンターで、2016年度「神奈川県リフレッシュプログラム」に向けたキックオフ講演会が行われました。約40人が集まり、講師の話や学生の報告を熱心に聞きました。

最初にあいさつに立った山際正道代表は「檜葉町は帰還を進めています、進める町の職員が檜葉町から離れたところに住んでいるように、表向き「もう放射線は大丈夫ですよ」と言いながら、でも心配という心情があるようで、このあたりに檜葉町の悩みがあるように思います。私たちはこうしたことに関わりながら、できるだけ応援を続けていきたいと思います。今年も『リフレッシュプログラム』を成功させましょう」と述べました。

保養は必要

このあと福島市で子どもたちの保養と自然の中での保育を目指す活動を続けているNPO法人「青空保育たけの子」代表である辺見妙子さんから「被ばくから守り自然の中で子育てを」と題するお話がありました。辺見さんの講演の概要です。

4月16日から23日まで8日間、身体に線量計をつけてみました。この結果をグラフにすると、福島市内では高めですが、米沢に行っている時は低いことが分かります。意外なことにいつも子どもたちの集合場所として使っている公園が非常に高いことが分かりました。除染も終わり空間線量は低いとされている所です。この値を見てその場所を使うことをやめました。また、線量が突出して高い所もあります。福島市内にはまだホットスポットがあるのです。

行政がやる空間線量測定だけでは汚染の状況は十分に分からないのです。土壌汚染は公開されていません。子どもは土を口に入れたり高い線量の木肌に触ったりします。だから子どもを遊ばせていいのか不安になるのです。こうした福島の現状からすれば、まだ保養は必要と考えています。

震災前の2009年に保育を始めました。「自然の中で幼児期に大切な五感を磨き、その子らしさを大切に、共に成長する」ことを目的とした「青空保育たけの子」です。2010年4月に「青空幼稚園たけの子」と改名しました。東日本大震災、原発事故後の2011年11月から移動保育を始めました。

原発事故後に、子どもが外で遊ぶことについて福島県は「1時間当たりの空間線量が $10\mu\text{Sv}$ 以下であれば外で遊ばせて大丈夫です」(山下俊一氏)と言っていたのです。今でもこれは正しいと言っています。しかし、多くの人是不安感を強め子どもを連れて家族で避難しました。もちろん残った人も多かった。ところが福島市内のどこが線量が高いか分からない状況の中で、子どもたちは外に出ることもできず、外で遊ぶ時は夏でも長袖にマスクをしていました。当時「たけの子」にいたM君に「やりたいことは何」と聞くと「ブランコ」と答えていましたが、震災後に初めてブランコをしたのは6月末です。



講演する辺見妙子さん

このような状況の中で、福島市は冷暖房完備の市民会館のガラス張りの部屋の中に砂遊び場を作りました。しかし、屋外の砂場であれば木の葉っぱを持ち込んで自由に遊ぶことができます。自然と触れ合うことのない室内砂場で遊んで子どもたちは何を感じるでしょうか。本当に疑問です。また、市内に冒険遊び場を作ったのですが、放射線測定（2014年7月）してみると桜の木の横、ベンチの前などの線量は高いのです。

「たけの子」では、毎日、山形県米沢市まで行って、自然の中で思い切って遊ばせています。現在、7人の子どもの子がいます。保養に参加したお母さんの話ですが、他の人に保養の話をしたら「まだそんなこと言っているの!」と言われたそうです。福島では本音の話ができない状況になっています。子どもだけではなくお母さん方が共感しあって話す場も大事だと思っています。

子どもを保養に参加させている母親も「行かせてよかった」と思うのですが、福島に戻ると「ではなぜ福島にいるの?自分がしていることは悪?」、「放射線のこと忘れなきゃ。もう考えるのよそう」と思ってしまうようです。心の中でぐるぐる回っているのです。

子どもたちは原発事故とは別に、以前に比べ外で遊ばなくなっています。子どもの遊びは危なくて汚くてばかばかしいんです。意味のないのが遊びです。そこから始まります。室内は直線です。直線文化に押し込まれると感情が養われません。外で遊ぶことは意味のあることです。

私は、「たけの子」での保育と放射線の問題から見えてきたことは「教育」だと思っています。最近見た「かすかな光へ」という映画の中で「人は違う存在。ひとりひとりの人間がかかわって生きている。そして人は変わる。この3つが保障されることが基本的人権」というメッセージがありました。これだ!と思っています。

福島の人的心情は複雑

辺見さんの講演の後、フロアからの質問・意見を受けました。この中で放射線量が高い福島に住む人達にどのように話したらいいのかという質問に対して福島の人達は、危ないと思っています。でも外の人に「危ないんじゃない」と言われるのは嫌なんです。ですから行政は線量を調べているし食品だって調べている。でもちょっとこういうところに行ったらいいかも、と肯定的に話すといいと思います。直接的な言葉で言われると、人はつらいですよ。あんなんかに言われなくたって分かっています、と言いたくなるんです。

また、「本当に大丈夫」と思えるか状況については、科学的根拠を示すことで、たとえば尿検査をしっかりとやるとかが必要。なんとなく大丈夫ではだめで、不安感が増すだけと答えました。



こらっせユースの報告

「こらっせユース」も報告

「こらっせユース」の大学生が報告しました。平戸萌子さん、山崎由里恵さんが昨年夏、山北町にて3泊4日で行った「リフレッシュプログラム」について、写真などで詳しく説明をしました。また、松田優希さんが、春休みに行った学生による柵葉学童保育支援の様子を報告しました。どちらの報告も、パワーポイントを使ったプレゼンテーションで、子どもたちに対する気持ちがよく伝わってくる、とてもわかりやすい内容でした。（事務局 蜂谷隆）